

2017年度クロマトグラフィー科学会功労賞受賞者プロフィール



相山 律男 あいやま りつお

現職

株式会社ヤクルト本社 中央研究所 特別研究員

現在の専門

米国食品安全強化法に基づく食品安全および食品防御

学歴・職歴

1978年 3月 東京薬科大学薬学部薬学科 卒業
1980年 3月 東京薬科大学大学院博士課程 前期（薬学研究科） 修了（薬学修士）
1983年 3月 東京薬科大学大学院博士課程（薬学研究科） 修了（薬学博士）
1983年 4月 株式会社ヤクルト本社 入社（中央研究所 配属）
1989年 4月 中央研究所 応用研究Ⅱ部 指導研究員
1995年 4月 中央研究所 応用研究Ⅱ部 主任研究員
1998年 4月 中央研究所 応用研究Ⅱ部 応用生物研究室長
2004年 4月 中央研究所 応用研究Ⅱ部 副主席研究員（兼）応用生物研究室長
2007年 4月 医薬開発部 副主席研究員（兼）製剤開発課長
2008年 4月 医薬開発部 主席研究員
2011年 4月 医薬品事業本部付理事（兼）医薬開発部 主席研究員
2012年 4月 研究開発本部付理事（兼）研究管理部 主席研究員
2014年 4月 研究開発本部付審議役（中央研究所担当）
2015年 4月 中央研究所 特別研究員（信頼性保証室担当 分析試験研究所担当）
現在に至る

学位

1983年 3月 薬学博士（東京薬科大学）

資格

薬剤師
米国食品安全近代化法 予防的管理有資格者（PCQI）

主な業務

イリノテカン塩酸塩「カンプト」の研究開発
オキサリプラチン「エルプラット」の研究開発
ジェネリック医薬品（「レボホリナート」「ゲムシタビン」等）の開発
蕃爽麗茶（特定保健用食品）の関与する成分の分析

クロマトグラフィー科学会：

1998年 1月～2003年 12月 評議員
2004年 1月～2011年 12月 理事（会計担当 学術担当）
ワークショップ企画 1998年（第1回目）～2011年
第20回クロマトグラフィー科学会議（東京）実行委員2009年11月11日～13日

クロマトグラフィー科学会との出会い

相山 律男

このたびは、名誉ある功労賞をいただきありがとうございます。

私と液体クロマトグラフィーの出会いは比較的古いものでした。大学院のとき、同大学にはクロマトグラフィーの分野で有名な原昭二教授（現、名誉教授）がいらっしゃいました。原研究室の土橋朗君（現、教授）は同級生でした。私は生薬学教室でしたが、原先生や土橋先生の影響で比較的早い時期から液体クロマトグラフィーによる分取・分析を経験することができました。1970年代の植物成分の分離分画は、破碎型シリカゲルを太いガラスコック付きカラムにスラリー充填し、植物エキスを付した後、自然落下でポタポタと落ちる溶離液を三角フラスコに受けるのが一般でした。しかし、当生薬学教室では既に、両端を細く絞ったガラス管をテフロン栓で固定し、内部に球形シリカゲル粒子をタッピングして充填したカラムを用い、移動相をポンプで送って分画していました。いわゆる中圧液体クロマトグラフィーというものです。自然落下に比べ、とても分画時間が早く、再現性の良い方法でした。この経験が、長い間クロマトグラフィーに携わる礎になったと思います。

大学院を終えて、(株)ヤクルト本社に入社し中央研究所に配属されました。入社後直ぐに、「塩酸イリノテカン」の開発研究プロジェクトを命ぜられました。プロジェクトのリーダー的な存在だったのが、寺田清課長（医薬品開発部長、専務取締役、顧問を歴任し、現在退職）でした。寺田氏が、当時クロマトグラフィー科学会の理事を務めておりました関係で、クロマトグラフィー科学会の学術集会在幾度かヤクルトホールで開催されていました。その後、寺田氏は会社役員に昇格しましたので、クロマトグラフィー科学会を私が引き受け、評議員となりました。

クロマトグラフィー科学会では、当時から会員の減少に悩まされていました。ある日の役員会で、「会員数を確保するために学会でワークショップを検討したらどうか」と提案がありました。おそらく、提案者は富山大学の宮部寛志教授と記憶しています。そこで、企業出身者である私に話しが回ってきました。さっそく田辺製薬(株)の西博行氏（現、安田女子大学 教授）、塩野義製薬(株)の岡林義人氏、シェーリングの鈴木博文氏（現、バイエル薬品）、味の素(株)の宮野博氏等に声をかけ、企業のクロマトグラファーが興味を引く話題は何かについて話し合いました。ちょうど、医薬品規制調和国際会議（ICH: International Council for Harmonisation of Technical Requirements for Pharmaceuticals for Human Use）において、1995年に「分析バリデーションに関するテキスト（実施項目）」、1997年に「分析法バリデーションに関するテキスト（実施方法）」が通知された時期であったので、これを取り上げ、無事に第1回目のワークショップを開催することができました。その後、立木秀尚氏（東和薬品(株)）らにも手助けしていただき、企画チームはさらに強力になり、種々の分野での興味ある企画がなされてきたと思います。

2012年に医薬品事業本部から研究開発本部に戻ることにになり、それまで担当していたクロマトグラフィー科学会の役員やワークショップの企画を分析試験研究所の原田勝寿所長に引き継ぎました。シンポジウムや学会会議に参加する機会も少なくなっていました。昨年、受賞を機会に久しぶりに学会会議に参加することができました。現在でも、ワークショップが行われていることに感涙しました。これからも、話題となっているテーマをやさしく解説していただけるワークショップを継続的に企画していただければと思います。